

続・神宮外苑の鳥類相

伊藤 洋文
Hirobumi ITO

1 はじめに

2020年から世界中に蔓延した新型コロナウイルスのために、国外へはもちろんのこと、国内旅行もままならなくなってしまった。もっぱら自宅と職場の往復ばかりの単調な生活を余儀なくされて久しい。『外苑春秋』には創刊号以来、何かしらのネタで毎回寄稿させていただいてきたが、国内外問わず出かけることが好きな私は、行動範囲が制限されてしまったことから、目新しいテーマを企画する余裕が全くなくなってしまった。そのため、身近な自然をテーマとした内容を『外苑春秋』第12号に寄稿することにした。

私は、かつて2018年に『外苑春秋』第8号の論文特集号が発刊された際に、「神宮外苑の鳥類相一朝6分間のバードウォッチングから—」という論文を寄稿させていただいた。朝の通勤時に、地下鉄外苑前駅から国学院高校までの通勤ルートで見かけた鳥類のデータ約20年分（1998年12月～2018年3月）を、集計して分析したものである。いわば暇つぶしで集めたデータを用いての、小学生の夏休みの自由研究程度の内容であったが、日々のデータを累積したことにより、神宮外苑の身近な鳥類について、その種類や出現状況の特徴を知ることができた。その概要は、2章で振り返りたい。

ところで、ラインセンサスを簡略化した通勤時のバードウォッチングは、すっかり朝の日課となっており、前回の論文を出した2018年以降も引き続いてデータを記録し続けている。また、センサスルート以外にも校内や学校周辺において鳥類に関わる新しい発見もいくつかあったことから、今回は2018年1月から2022年3月までの足かけ5年分の後日談をまとめることにした。なお、約20年分のデータをまとめた前回の論文に対し、今回は足かけ5年分と分量も少ないことから、論文ではなく論説として寄稿することとした。

2 前回のまとめ

(1) 主要12種と希少種

1998（平成10）年12月から2018（平成30）年3月までのおよそ20年間に合計約2700回の調査を行った結果、地下鉄銀座線外苑前駅（3番出口）から国学院高校までの調査ルートと本校敷地内において、19種の鳥類を確認した。それら19種のうち12種は、比較的多く出現する鳥類であった。そして、残る7種は、記録の少ない希少種であった。それぞれの和名(学名)を以下に、「日本鳥類目録」(日本鳥学会)での記載順で記す。

【主要12種】

- ①キジバト (*Streptopelia orientalis*)
- ②オナガ (*Cyanopica cyanus*)
- ③ハシブトガラス (*Corvus macrorhynchos*)
- ④シジュウカラ (*Parus minor*)
- ⑤ツバメ (*Hirundo rustica*)
- ⑥ヒヨドリ (*Hypsipetes amaurotis*)
- ⑦メジロ (*Zosterops japonicus*)
- ⑧ムクドリ (*Sturnus cineraceus*)
- ⑨スズメ (*Passer montanus*)
- ⑩ハクセキレイ (*Motacilla alba lugens*)
- ⑪ドバト (*Columba livia var.domestica*)
- ⑫ワカケホンセイインコ (*Psittacula krameri manillensis*)

【希少種】

- ⑬カワウ (*Phalacrocorax carbo*)
- ⑭アオサギ (*Ardea cinerea*)
- ⑮コゲラ (*Dendrocopos kizuki*)
- ⑯ジョウビタキ (*Phoenicurus auroreus*)
- ⑰シロハラ (*Turdus pallidus*)
- ⑱ツグミ (*Turdus naumanni*)
- ⑲カワラヒワ (*Carduelis sinica*)

(2) 出現状況の概要

① 年ごとの出現状況

- ・スズメとヒヨドリは、約20年間安定して出現。

- ・ムクドリ、ドバト、ワカケホンセイインコは、増加傾向。
- ・ハシブトガラス、ツバメは、近年減少傾向。
- ・キジバト、オナガは、今後増加の可能性あり。

② 月ごとの出現状況

- ・スズメ、ドバト、ハシブトガラスは、年間を通してよく出現。
- ・夏鳥のツバメは、4～8月に出現。
- ・ヒヨドリ、メジロは4～9月、ハクセキレイは5～8月に減少。

③ 季節ごとの出現状況

- ・スズメは、どの季節にも最も多く出現。
- ・次いでドバトとハシブトガラスが、どの季節も多い。
- ・さらにムクドリとヒヨドリが続き、春にはツバメが多い。

④ 天候ごとの出現状況

- ・天候に関わらずスズメは多く、特に雨天時は目立つ。
- ・スズメ、ドバト、ハシブトガラスは、晴天時よりも曇天時に多く出現。

⑤ その他の出現状況

- ・スズメは、降雪時、残雪時でも最も多く出現。
- ・ドバト、スズメ、ハシブトガラスは、強風時、台風接近時でも多く出現。
- ・東日本大震災前後での鳥類の出現状況に、大きな変化はなし。

以上が、前回 2018 年の『外苑春秋』第 8 号の論文特集号で報告した内容の概要である。

3 神宮外苑におけるその後の鳥類出現状況

(1) 希少種の状況

2章で紹介した7種の希少種について、神宮外苑における2018（平成30）年1月から2022（令和4）年3月までの足かけ5年間の観察記録は以下の通りである。なお、これら希少種の出現記録は、通勤時の調査ルート以外での観察例も含んでいる。また、それぞれの和名の前の通し番号は2章（1）に準ずる。

⑬ カワウ

2018.3.3の帰宅時に、スタジアム通りの上空を通過。

2019.7.11の帰宅時、伊藤忠ガーデン（旧CIプラザ）の上空を通過。

⑭ アオサギ

2019.2.4の通勤時に、ハシブトガラスに追われて飛翔する個体を確認。

⑮ コゲラ

2018.5.29に朝の調査ルートで1羽、2021.3.16に神宮球場東側の樹木にて2羽観察。

⑯ ジョウビタキ

この5年間は確認できず。

⑰ シロハラ

この5年間は確認できず。

⑱ ツグミ

2018.2.17に校庭のフェンス、2019.2.6に青山高校前、同年2.26にイチヨウ並木に出現。

2022.3.14には理科館前の芝生に現れた。

⑲ カワラヒワ

2018.4.7にイチヨウ並木に出現。2022.3.19に神宮球場前の樹木に4羽が飛来した。

以上のように、通勤時の調査ルート以外も含めて、観察された個体数が急に増えたような種は特別なかった。そのため、今後もこれらの7種は希少種のカテゴリーで扱ってよいかと思われる。なお、2018年1月から2022年3月までに朝の調査ルートで確認した出現種数の経年変化を、前回紹介した2017年までの結果と合わせて図示すると、図1のようになる。

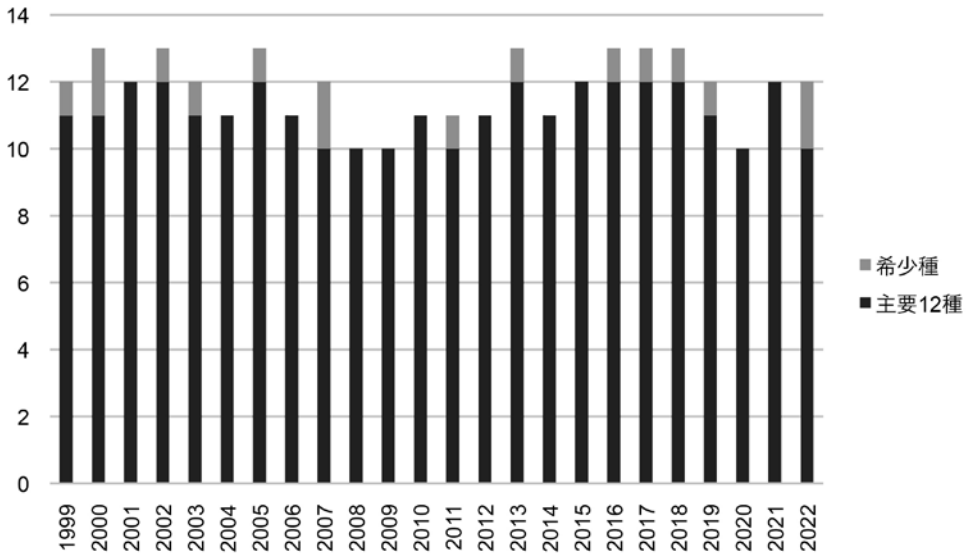


図1 出現種数の経年変化

図1より、2018年以降の5年間の傾向は、それ以前の19年間と比較してもあまり変わっていないことがわかる。なお、2022年には主要12種のうちオナガとツバメは含まれていないが、2022年は1月～3月だけのデータであるため、夏鳥のツバメが観られないのは時期的に仕方がないといえる。一方のオナガは、朝の調査時以外の時間帯には目撃している。

ところで、この5年で新たに神宮外苑にて確認できた鳥類種が4種あった。4種のうち3種は朝の調査時以外であるが、1種は通勤時に確認できた鳥類であるため、図1の2022年のデータに希少種として加えている。これらの4種については、次の4章で紹介したい。

(2) 主要12種における年ごとの出現状況

2018年から2022年までの、年ごとの出現状況をまとめたものが表1-1および表1-2である。(ただし、2022年は3月までのデータ。)

調査回数は年によってばらつきがあり、年ごとの総個体数を単純に比較はできない。そのため、年間の総個体数を調査回数で割り、調査1回当たりの平均出現個体数を求めてまとめたものが表1-1である。また、調査回数のうち何回出現したか、各種の出現頻度を求めてまとめたものが表1-2である。

観 察 年	観 察 日 数 (A)	上段：各種の出現個体数 (B)											
		下段：各種の平均出現個体数 (B/A)											
		キ ジ バ ト	オ ナ ガ	ガハ ラシ ス ト	カシ ラジ ユ ウ	ツ バ メ	ヒ ヨ ド リ	メ ジ ロ	ム ク ド リ	ス ズ メ	セハ キク レイ	ド バ ト	イホワ ンカ コセケ イ
2018	166	38	20	138	17	25	195	8	185	560	17	938	135
		0.23	0.12	0.83	0.10	0.15	1.17	0.05	1.11	3.37	0.10	5.65	0.81
2019	147	34		145	11	20	156	14	191	385	2	923	102
		0.23		0.99	0.07	0.14	1.06	0.10	1.30	2.62	0.01	6.28	0.69
2020	132	14		156	10		92	16	146	271	12	702	71
		0.11		1.18	0.08		0.70	0.12	1.11	2.05	0.09	5.32	0.54
2021	149	15	1	131	15	21	171	25	92	409	5	752	135
		0.10	0.01	0.88	0.10	0.14	1.15	0.17	0.62	2.74	0.03	5.05	0.91
2022 (1~3 月)	43	2		41	7		85	10	4	128	10	309	26
		0.05		0.98	0.17		1.98	0.24	0.10	2.98	0.24	7.19	0.62
計	637	103	21	611	60	66	699	73	618	1753	46	3624	469
		0.16	0.03	0.96	0.09	0.10	1.10	0.11	0.97	2.75	0.07	5.69	0.74

表 1-1 年ごとの平均出現個体数

観 察 年	観 察 日 数 (A)	上段：各種の出現日数 (B)											
		下段：各種の出現頻度 (B/A×100(%))											
		キ ジ バ ト	オ ナ ガ	ガハ ラシ ス ト	カシ ラジ ユ ウ	ツ バ メ	ヒ ヨ ド リ	メ ジ ロ	ム ク ド リ	ス ズ メ	セハ キク レイ	ド バ ト	イホワ ンカ コセケ イ
2018	166	33	12	82	14	18	66	7	68	150	17	150	62
		19.9	7.2	49.4	8.4	10.8	39.8	4.2	41.0	90.4	10.2	90.4	37.3
2019	147	29		86	9	15	66	11	61	132	2	129	52
		19.7		58.5	6.1	10.2	44.9	7.5	41.5	89.8	1.4	87.8	35.4
2020	132	13		91	9		51	11	34	118	12	118	41
		9.8		68.9	6.8		38.6	8.3	25.8	89.4	9.1	89.4	31.1
2021	149	13	1	84	14	15	69	18	34	127	5	126	63
		8.7	0.7	56.4	9.4	10.1	46.3	12.1	22.8	85.2	3.4	84.6	42.3
2022 (1~3 月)	43	1		24	5		26	6	4	38	9	41	14
		2.4		57.1	11.9		61.9	14.3	9.5	90.5	21.4	97.6	33.3
計	637	89	13	367	51	48	278	53	201	565	45	566	232
		14.0	2.0	57.7	8.0	7.5	43.7	8.3	31.6	88.8	7.1	89.0	36.5

表 1-2 年ごとの出現頻度

表 1-1 の平均出現個体数を棒グラフに、また、表 1-2 の出現頻度を折れ線グラフにして種別に表したものが図 2 である。前回の論文で報告した、1999 年から 2017 年における各種の平均値も合わせて図示した。

1999 年～2017 年の平均とこの 5 年のデータを見比べると、ハシブトガラスやスズメはずっと安定した数を維持していることがわかる。また、ドバトやワカケホンセイインコは、かなり増加して安定している様子がうかがえる。シジュウカラ、ヒヨドリ、メジロも微増傾向というところだろうか。ムクドリは、微増後に減少傾向が見られる点が少々心配である。

さて、前回の論文で、キジバトやオナガは今後増加するかもしれないと書いたが、また減少に転じた。いずれの種も、ちょうど論文で最後の調査期間となった 2017 年から 2、3 年間、一時増えただけであり、その後も増え続けるかと思いきや、実際はさっぱりであった。

オナガといえば、2018.6.25 夕方の退勤時、外苑前駅に向かう道端にオナガのひながいた。羽毛はだいたい生え揃っているが、まだ飛べるまでにはなっていないようだ。そばの街路樹の樹上には、親鳥と思われる個体が見守っていた。こういう場合、鳥類保護の視点からは手助けしてはいけないといわれている。ちょうど本校の女子生徒が 2 名、心配そうに通りがかったため、「手を出したらダメだよ」と声をかけた。あのオナガ親子がその後どうなったのか、気になるところである。

ところで、この 5 年間のうち、ツバメは 2020 年と 2022 年に全く記録されていない。2022 年については前に述べた通り、1～3 月の調査であるため、ツバメはまだ渡ってきていない。一方、2020 年に記録されていないのは、近年調査ルート近くで営巣するツバメがいなくなったことに加えて、新型コロナウイルスの感染拡大のために、この年の 3 月 5 日から 5 月末まで自宅待機となり、調査できなかったことが原因である。人間がコロナウイルスに行動の自由を奪われたこの年も、ツバメは神宮外苑を飛び回っていたのだろうか。

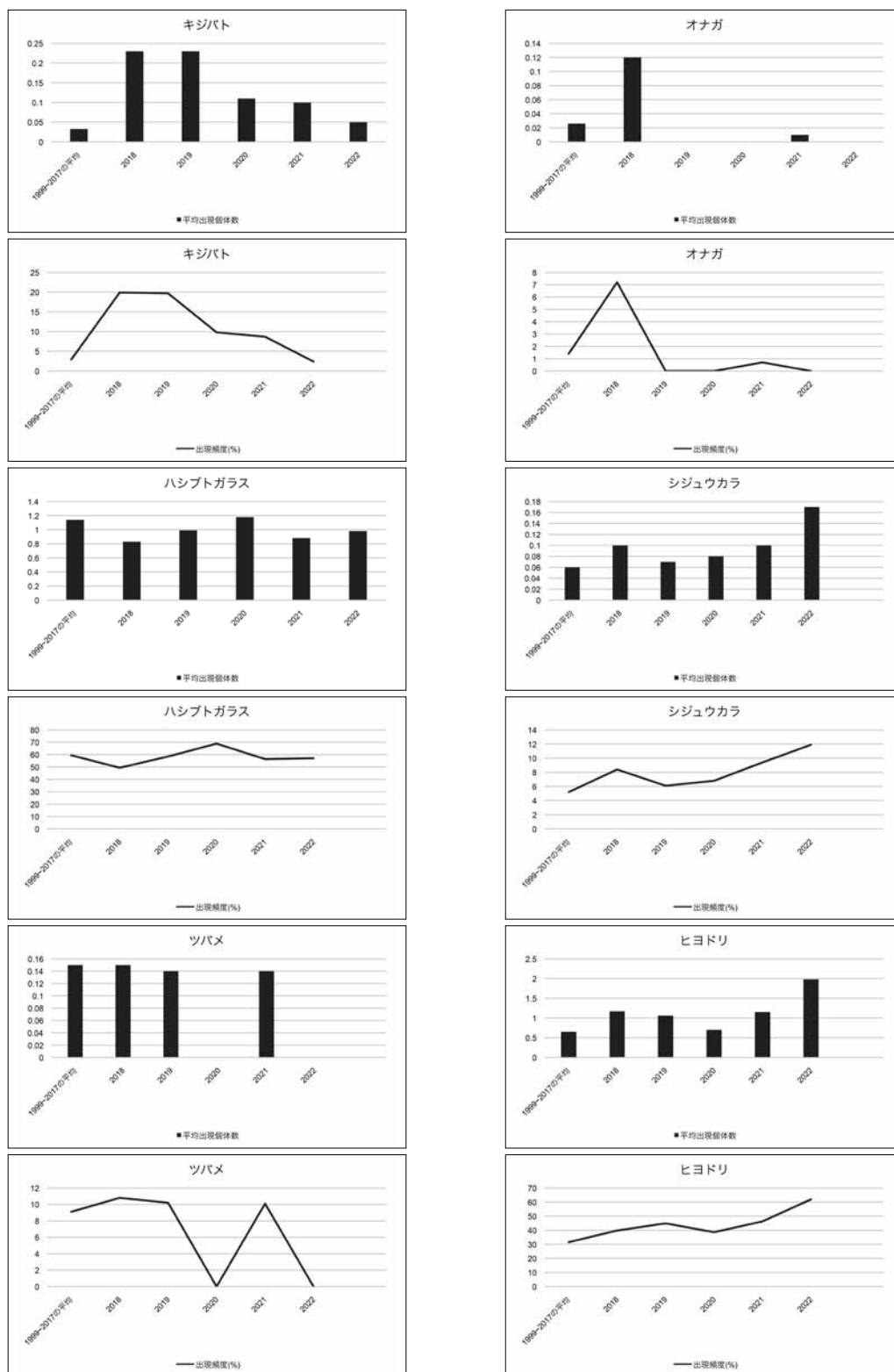


図2 年ごとの各種の平均出現個体数と出現頻度(1)

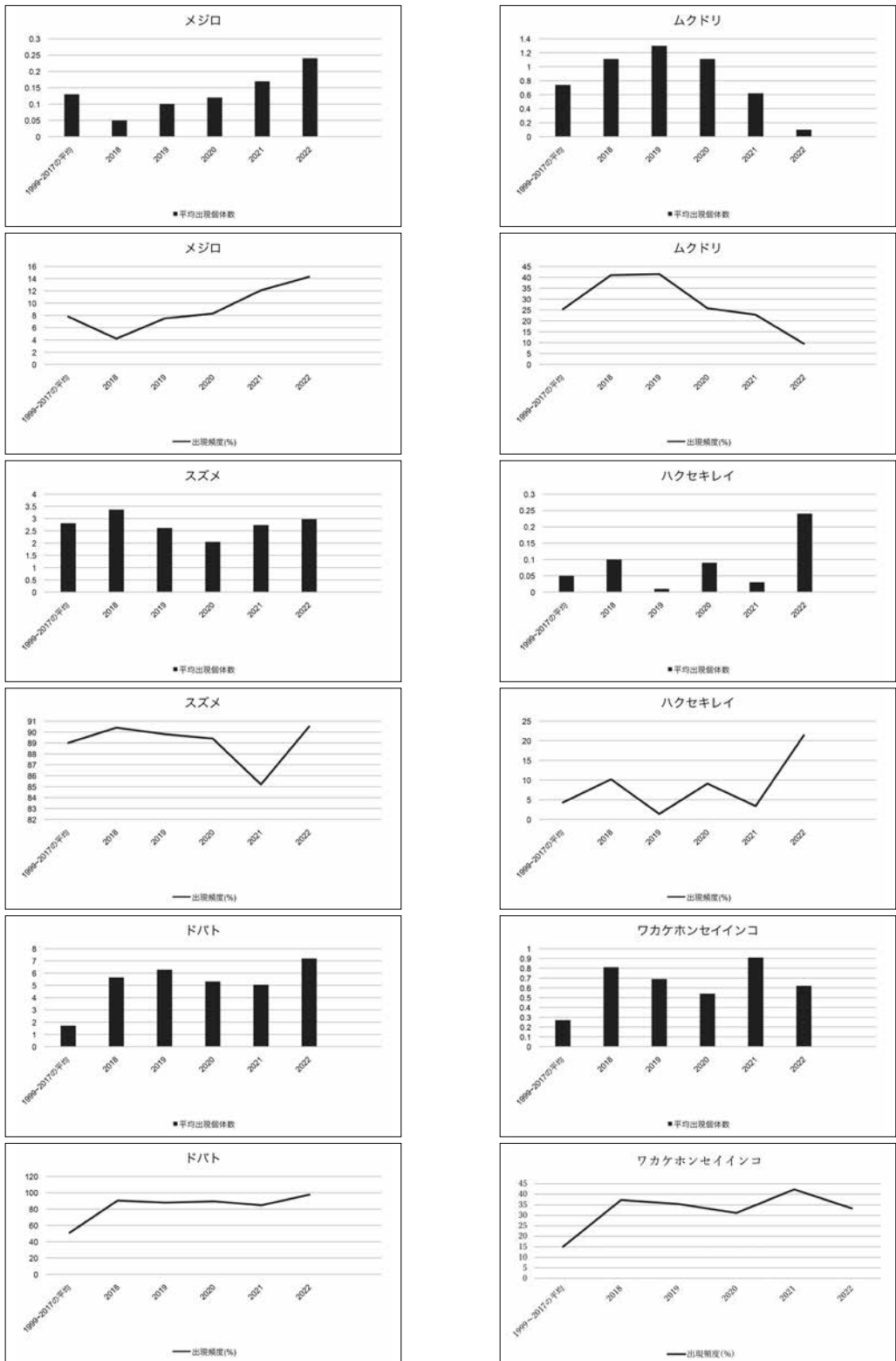


図2 年ごとの各種の平均出現個体数と出現頻度(2)

(3) 主要12種における月ごとの出現状況

2018年1月から2022年3月までの、月ごとの出現状況をまとめたものが表2-1および表2-2である。年ごとの出現状況のまとめと同様に、表2-1は月ごとの総個体数を調査回数で割った平均出現個体数、表2-2は月ごとの出現日数を観察日数で割った出現頻度をまとめている。

観察月	観察日数(A)	上段：各種の出現個体数(B)											
		下段：各種の平均出現個体数(B/A)											
		キ ジ バ ト	オ ナ ガ	ガ ハ ラ シ ス ブ ト	カ シ ラ ジ ユ ウ	ツ バ メ	ヒ ヨ ド リ	メ ジ ロ	ム ク ド リ	ス ズ メ	セ ハ キ ク レ イ	ド バ ト	イ ホ ワ ン カ コ セ ケ イ
1	64	7		67	8		221	23	102	171	9	446	40
		0.11		1.05	0.13		3.45	0.36	1.59	2.67	0.14	6.97	0.63
2	68	13		64	8		75	6	69	271	12	530	36
		0.19		0.94	0.12		1.10	0.09	1.01	3.99	0.18	7.79	0.53
3	62	16		54	9		38	7	43	201	7	492	23
		0.26		0.89	0.15		0.61	0.11	0.70	3.24	0.11	7.94	0.38
4	47	10	9	40	6	4	6	1	49	155	2	230	31
		0.21	0.19	0.85	0.13	0.09	0.13	0.02	1.04	3.30	0.04	4.89	0.66
5	46	5	6	33	1	34	5		51	152		160	38
		0.11	0.13	0.72	0.02	0.74	0.11		1.11	3.30		3.48	0.83
6	64	14	6	43	6	24	16		53	191		202	65
		0.22	0.09	0.67	0.09	0.38	0.25		0.83	2.98		3.16	1.02
7	25	7		24		4	1		4	50		74	3
		0.28		0.96		0.16	0.04		0.16	2.00		2.96	0.12
8	29	1		26	2		8			68	1	132	8
		0.03		0.90	0.07		0.28			2.34	0.03	4.55	0.28
9	63	12		70	4		11	2	4	122	4	328	68
		0.19		1.11	0.06		0.17	0.03	0.06	1.94	0.06	5.21	1.08
10	64	7		79	10		114	11	60	157	7	379	76
		0.11		1.23	0.16		1.78	0.17	0.94	2.45	0.11	5.92	1.19
11	61	9		76	5		97	16	95	121	4	412	47
		0.15		1.25	0.08		1.59	0.26	1.56	1.98	0.07	6.75	0.77
12	44	2		35	1		107	7	88	94		239	34
		0.05		0.80	0.02		2.43	0.16	2.00	2.14		5.43	0.77
	637	103	21	611	60	66	699	73	618	1753	46	3624	469

表2-1 月ごとの平均出現個体数 (2018.1月～2022.3月)

観 察 月	観 察 日 数 (A)	上段：各種の出現日数 (B)											
		下段：各種の出現頻度 (B/A×100%)											
		キ ジ バ ト	オ ナ ガ	ガハ ラシ ス ブ ト	カシ ラジ ユ ウ	ツ バ メ	ヒ ヨ ド リ	メ ジ ロ	ム ク ド リ	ス ズ メ	セハ キク レイ	ド バ ト	イホワ ンカ コセケ イ
1	64	7		37	7		53	18	30	51	8	60	20
		10.9		57.8	10.9		82.8	28.1	46.9	79.7	12.5	93.8	31.3
2	68	13		41	6		47	4	24	62	12	63	20
		19.1		60.3	8.8		69.1	5.9	35.3	91.2	17.6	92.6	29.4
3	62	13		27	7		22	6	16	57	7	56	15
		21.0		44.3	11.5		35.5	9.8	26.2	91.9	11.5	90.3	24.6
4	47	9	2	26	5	3	4	1	24	45	2	43	20
		19.1	4.3	55.3	10.6	6.4	8.5	2.1	51.1	95.7	4.3	91.5	42.6
5	46	4	5	24	1	21	4		26	44		40	20
		8.7	10.9	52.2	2.2	45.7	8.7		56.5	95.7		87.0	43.5
6	64	11	6	31	6	21	12		25	61		54	28
		17.2	9.4	48.4	9.4	32.8	18.8		39.1	95.3		84.4	43.8
7	25	6		13		3	1		2	21		20	3
		24.0		52.0		12.0	4.0		8.0	84.0		80.0	12.0
8	29	1		17	2		5			28	1	27	5
		3.4		58.6	6.9		17.2			96.6	3.4	93.1	17.2
9	63	9		42	3		8	1	2	53	4	51	34
		14.3		66.7	4.8		12.7	1.6	3.2	84.1	6.3	81.0	54.0
10	64	7		42	8		41	7	20	61	7	55	28
		10.9		65.6	12.5		64.1	10.9	31.3	95.3	10.9	85.9	43.8
11	61	8		44	5		46	10	18	50	4	59	23
		13.1		72.1	8.2		75.4	16.4	29.5	82.0	6.6	96.7	37.7
12	44	2		23	1		36	6	14	33		37	16
		4.5		52.3	2.3		81.8	13.6	31.8	75.0		84.1	36.4
	637	90	13	367	51	48	282	53	201	568	45	574	232

表 2-2 月ごとの出現頻度 (2018.1月 ~ 2022.3月)

表 2-1 の月ごとの平均出現個体数を棒グラフに、表 2-2 の月ごとの出現頻度を折れ線グラフにしてまとめたものが図 3 である。

月ごとの出現状況は、前回の論文で報告した内容とほぼ一致していた。

スズメ、ドバト、ハシブトガラスは、年間を通して多く出現している。その一方で、オナガヤツバメは春から夏に出現するのに対し、ヒヨドリ、メジロ、ハクセキレイなどは、逆に春から夏に減少する。ただ、8月に観察記録が減る種の中には、調査日数が少ないことに起因するケースもあり得ると思われる。観察する回数が減れば、それだけ鳥たちと出会う確率も低くなってしまうからである。不自然なグラフの形になったとしても、あくまで大まかな傾向として捉えるべきであろう。

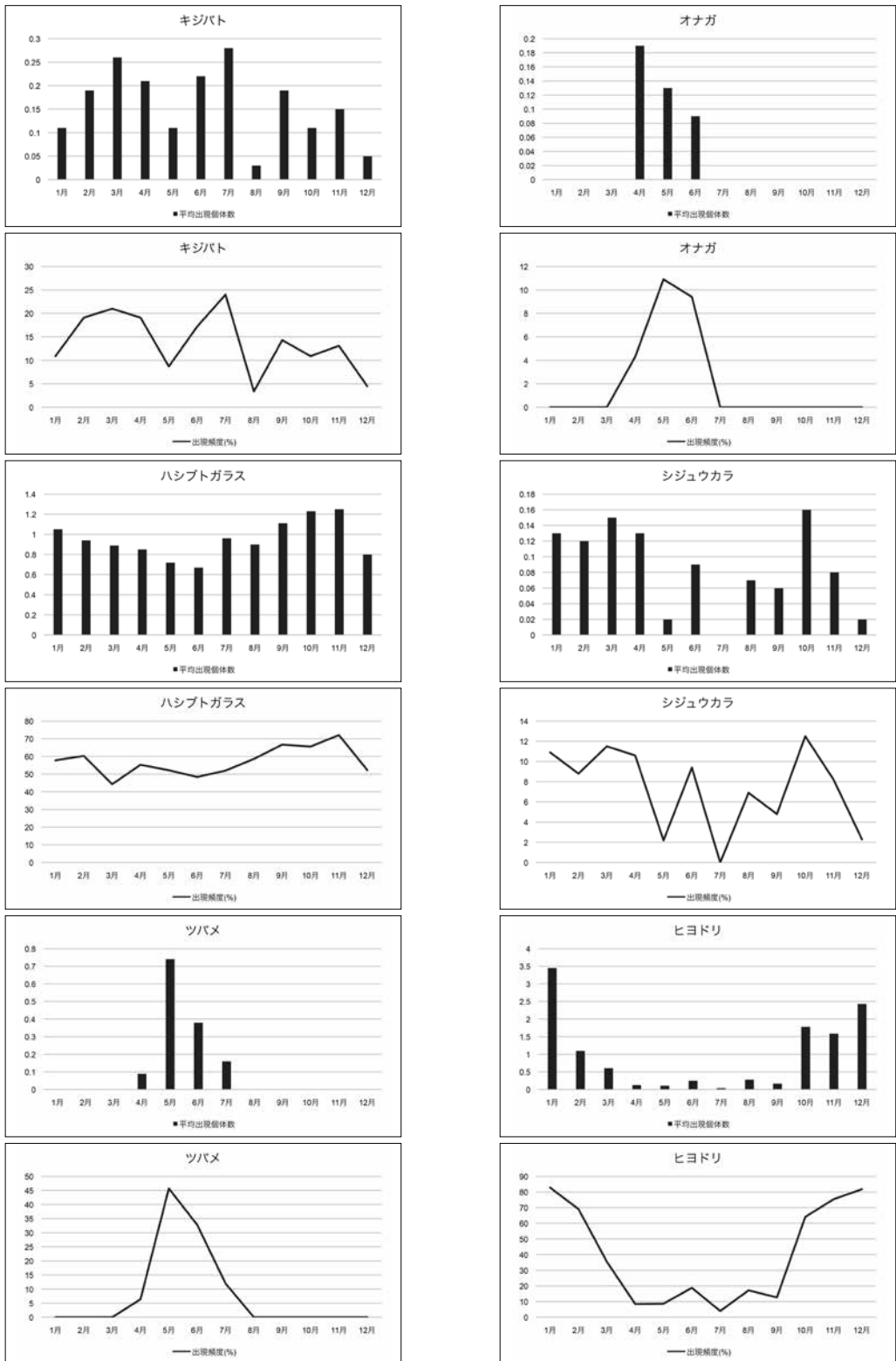


図3 月ごとの各種の平均出現個体数と出現頻度 (1)

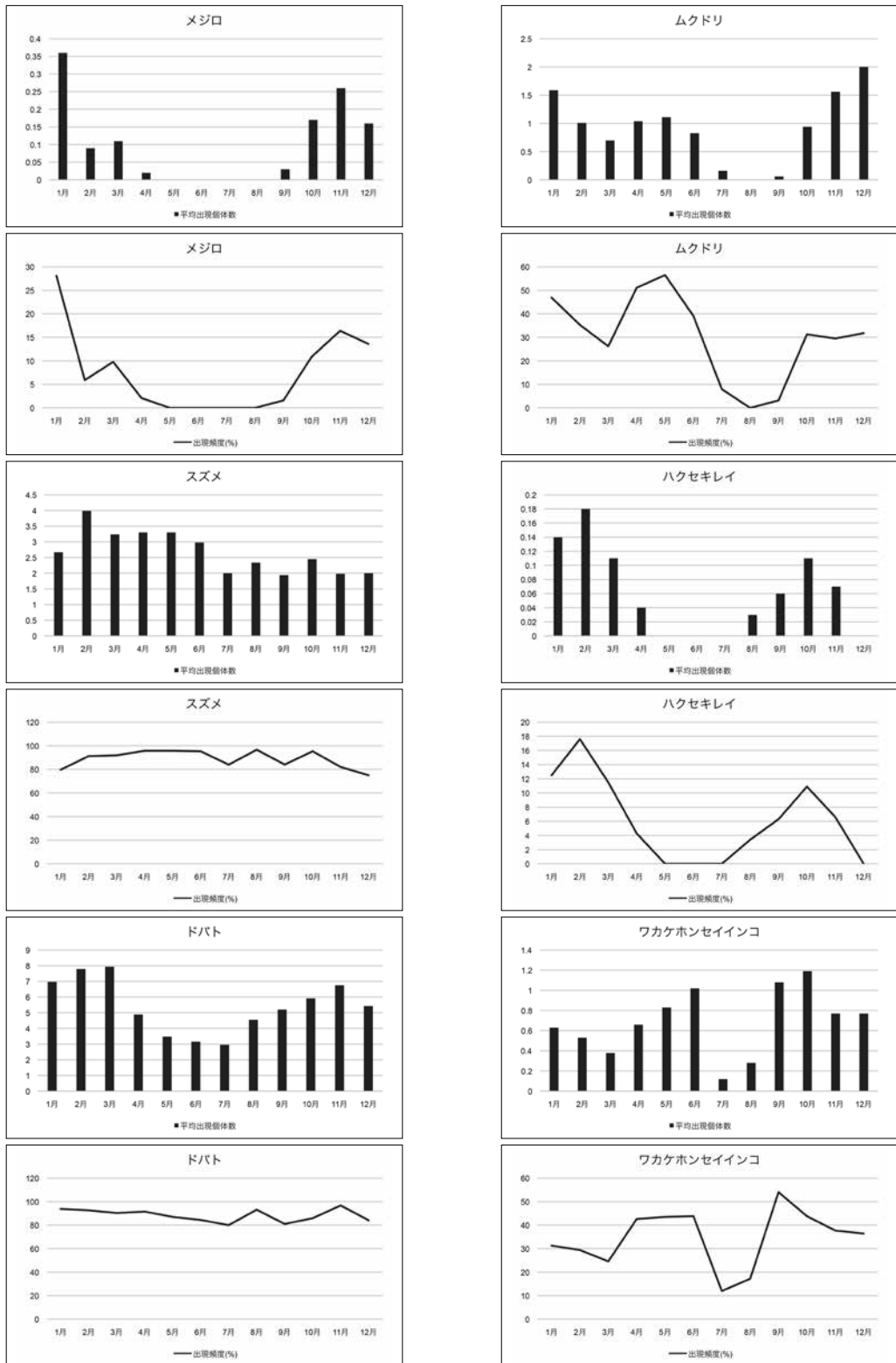


図3 月ごとの各種の平均出現個体数と出現頻度 (2)

ところで、2018年に発表した論文の中では、約20年間における「主要12種における季節ごとの出現状況」や、「主要12種における天候ごとの出現状況」、さらには「その他の出現状況」をまとめた。しかし、今回の5年分の調査結果は前回と類似したものであり、目新しい知見は得られなかったため、ここでの記載は省略したい。

4 出勤時以外も含めた鳥類関係6大ニュース

出勤時の調査ルート上以外に、高校の敷地内や学校周辺を含めると、前回の論文執筆以降のこの5年間に、鳥類に関する新しいニュースがいくつも確認できた。その中でも特筆すべき出来事を、ランキング形式で紹介したい。

(1) 第6位 鳥たちの営巣

2019年4月23日、「理科館の照明に鳥が巣を作っている」と、用務員さんが教えてくれた。理科館4階の照明を見に行ってみると、小枝が照明器具の上に集められ、その上に1羽のキジバトがしゃがんでいた。

キジバトの営巣を間近で観察できるというのは個人的には興味深かったが、照明器具の下は通路であり、糞を落とされると厄介である。幸いまだ産卵されていなかったため、可哀想ではあるがキジバトには退去してもらった(写真1・2)。



写真1 理科館遠景



写真2 キジバトの営巣(2019.4.23)

また、2021年3月27日、校庭の照明灯の上に、ハシブトガラスが木の枝を集めているのを発見した。キジバトと違って、ハシブトガラスは極めて攻撃的である。巣の近くを通った者が、子育てをしているカラスに襲われる事例は多い。明らかに危険性が高いため、すぐに撤去してもらった(写真3・4)。



写真3 校庭の照明灯

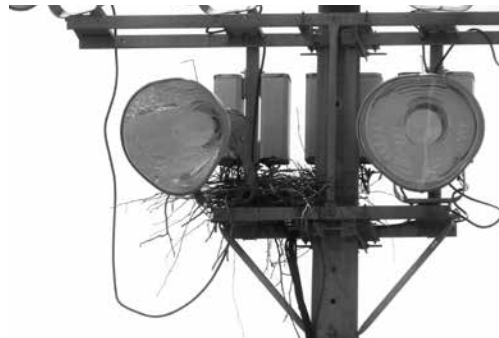


写真4 ハシブトガラスの営巣(2021.3.27)

一方、同じ鳥類でありながら、人様の迷惑にならないように営巣、子育てする鳥は、巣を撤去されることもなく子孫を残すことができる。そんなタイプの鳥類種の一つが、スズメである。

新型コロナウイルス感染拡大が起こる前は、全校生と教員合わせて千数百名が毎月、校庭で朝礼を行っていた。その朝礼が行われている最中に、校舎のとある場所に入出入りするスズメの姿が目に入った。それは、4階と5階のベランダの端にある鉄製の柵の一部である。横向きに突き出た鉄柱の先端には校庭側に穴が開いており、そこにスズメが入り出していたのだ。後日撮影した「雀のお宿」が、写真5、6である。

ところで、実際にそのフロアに行き、カメラを持つ手を伸ばして鉄柱の中を撮影してみた。しかし、予想に反してヒナの姿は見えなかった（写真7）。思ったよりも穴の奥深くで営巣しているようである。スズメの警戒心の深さがうかがえる。



写真5 雀のお宿の入り口がこのどこかに
(2019.5.19)

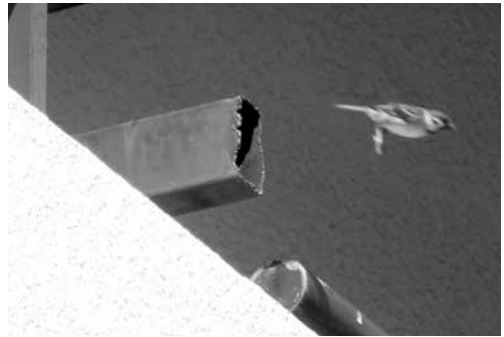


写真6 出入りするスズメ (2019.6.3)



写真7 巣の内部 (2019.5.19)

(2) 第5位 20種めの発見

論文用にデータを集めていた2018年3月までに確認した神宮外苑の鳥類種は、19種であった。ついに20種めを発見したのは、2019年4月13日夕方の退勤時である。ハシブトガラスに追われるように飛んできた1羽の鳥が目についた。かねてより20種めは何だろうかと考え

ていたが、このとき現れたのは予想だにできなかった種であった。カラスの追撃を振り切って神宮球場前の樹木にとまったのは、意表を突くきれいな水色の鳥、セキセイインコ（学名 *Melopsittacus undulatus*）だった（写真8）。鳥かごから逃げたペットであろう。

ところで、セキセイインコは体色に関わらず、成長に伴ってろう膜（くちばしの上の、鼻に当たる部分）の色が、オスでは青っぽく、メスでは赤っぽくなる。このとき撮影した写真から、この個体はオスとわかった。

セキセイインコは、原産地オーストラリアの野生種は緑色であるが、「背黄青鸚哥」とよばれるように、黄色や青色の個体が日本に最初に持ち込まれ、これが和名の語源といわれている。セキセイインコは日本各地で野生化しており、日本野鳥の会で発行している図鑑『フィールドガイド 日本の野鳥』にも、ワカケホンセイインコやブンチョウなどとともに掲載されている。

「幸福の青い鳥」は、やがて外苑の空へと飛び立っていった。



写真8 20種めのセキセイインコ (2019.4.13)

(3) 第4位 21種めの発見

2019年5月13日、本校の校庭には生徒と教員が勢揃いして、生徒総会が開催されていた。その中の何人が気付いたことか分からないが、上空を通過する白い鳥がいた。ダイサギ（学名 *Ardea alba*）である。

ダイサギは、いわゆる白サギ類の中では最も大きい。ツルのように首が長いが、ツルが首を伸ばして飛翔するのに対して、ダイサギやアオサギなどのサギ類は、首を折り曲げて飛翔する点異なる。

なお、このときは勤務中だったため、残念ながら写真は撮影していない。

(4) 第3位 22種めの発見

2021年3月2日、理科館を歩いていたとき、シジュウカラに似てはいるが少し違う鳥の声を耳にした。声が聞こえるヒマラヤスギの方を見ると、一目で分かる茶褐色の個体、ヤマガラ（学名 *Sittiparus varius*）の姿があった（写真9）。ヤマガラは、シジュウカラ科に属し、

コガラ、ヒガラなどと合わせてカラ類とよばれている鳥の一種である。

ところで、私は2019年まで山岳部の顧問を務めていた。部活で年一回必ず生徒と登る山の一つに、青梅の御岳山がある。山頂近くの、いつも入る食堂の窓近くには、野鳥の餌台があった。そして、最も頻繁にその餌台を訪れる鳥類種がヤマガラだった。やがて私は山岳部から離れ、その直後には新型コロナウイルスの感染拡大に見舞われたため、プライベートでも御岳山からは足が遠のいていた。それだけに、22種めに現れたヤマガラを見たとき、旧友と再会したかのような懐かしさがこみ上げてきた。なかなか会いに行けなかったから、ヤマガラの方から会いに来てくれたのだろうか。

折しもこの日、本校の第一記念館では、卒業式の予行演習が行われていた。出会いと別れが交錯する春の一日だった。



写真9 22種めのヤマガラ (2021.3.2)

(5) 第2位 23種めの発見

今回の『外苑春秋 12号』の締め切りも近い2022年3月17日の出勤時のことである。神宮球場前の横断歩道に近づいたとき、今まで神宮外苑では聴いたことはないが、おそらく誰でも知っている有名な鳥の鳴き声を聴いて驚かされた。ウグイス（学名 *Horornis diphone*）である。その美声の主は、球場脇の常緑樹の枝深くをチョコチョコ移りながら、「ホーホケキョ、ケキョケキョケキョ……」と爽やかで心地いい鳴き声を聴かせてくれた。残念ながら写真は撮れなかったものの、スマホでその美声を録音することができた。わずか1分間ほどの録音ではあるが、校務分掌の仕事で多忙な年度末に心を癒やしてくれる、とても効果的なカンフル剤となった。

(6) 第1位 水鳥の謎ついに解明

今まで神宮外苑で確認した鳥類種について、以前から疑問に思っていたことがあった。それは、確認した鳥類種の多くは陸の鳥であるが、希少種の中にはカワウやアオサギのように、水辺に生息する鳥が含まれていることである。観察記録によれば、カワウは2003年3月1日と4月4日、2013年1月24日に、いずれも1羽の上空飛翔を通勤中に確認している。また、

アオサギは2014年4月8日の始業式に校庭の上空を、2016年5月21日に寄り道をしたイチヨウ並木の上空を、それぞれ1羽が通過している。

面白いことに、それらの観察時の鳥の行動には共通点があった。それは、いずれの個体も南から北に向かって飛んでいたということである。彼らはどこに向かって飛んでいたのだろうか。

その謎を解くために周辺の地図を眺めていたとき、本校を含めた神宮外苑の北には新宿御苑があり、池と思しき水場が描かれているのに気がついた。これはひょっとして、と思った私は、2019年3月19日、千駄ヶ谷駅から近い新宿御苑まで、学校から歩いて訪れた。

嬉しいことに、予想は見事に的中した。園内には池がいくつもあり、カワウとアオサギの姿を確認することができたのである（写真10・11）。やはり彼らは、新宿御苑の池を目指して飛んでいたものと思われる。

新宿御苑の池には、その他にもダイサギ（写真12）、カルガモ、マガモ、カイツブリなどの水辺の鳥も生息していた。本校の周辺にはこのように多様な生態系が存在するおかげで、多様な鳥類種を確認できるということがよくわかった。

この後日、2019年5月13日の朝礼時に校庭の上空を北に向かって通過したダイサギも、おそらくこの新宿御苑を目指していたのであろうと推測できる。



写真10 新宿御苑のカワウ (2019.3.19)



写真11 新宿御苑のアオサギ (2019.3.19)



写真12 新宿御苑のダイサギ (2019.3.19)

5 おわりに

何気なく続けてきた通勤時の鳥類の観察は、1998年12月から2022年3月まで約25年、いつしかほぼ四半世紀にも及ぶようになった。よく飽きないものだと思ながら思うが、楽しいから続けられるのである。一年中観察できる鳥がいる一方、季節によって変動のある鳥もいる。鳥たちから季節の移ろいを感じることができるのである。また、たまにしか観られない鳥や、初めて観る鳥との新鮮な出会いは、その日一日を幸せな気分にしてくれる。たとえば、今回の報告は、2022年3月20日分までの記録をまとめたものであるが、そのわずか3日前の3月17日には23種目のウグイスが出現し、とても感激した。本校の理科館前で早春に咲きほこるウメの木々からも、いつかはウグイスの声が聞こえる日がきてほしいものである。

考えてみると、コンクリートのビルが林立する大都会の真っ只中の、わずか徒歩10分足らずのエリアで、20種を超える鳥類種と出会えることには驚かされる。まさに大都会の中の貴重な自然だ。しかし、そのように多くの鳥たちが集うこの神宮外苑には、大規模な樹木の伐採や既存の建造物の解体を含む再開発計画が浮上している。長年にわたり神宮外苑の鳥類を観察し続けてきた者としては、どう考えても現状を維持し続けることが生態学的に最も望ましいと思う。多くの鳥類を育ててきたこの神宮外苑の都市生態系が、いつまでも好ましい状態であり続けてほしいと願わずにはいられない。

続・神宮外苑の鳥類相 (p.3 ~ 23) 伊藤 洋文

神宮外苑の鳥類 (希少種)

2018年の論文の中で示した、出現頻度の低い鳥類7種のうち3種を写真で紹介する。コゲラは日本最小のキツツキ。ジョウビタキとツグミは、日本で冬を過ごす冬鳥である。(なお、ツグミは神宮外苑での撮影であるが、コゲラとジョウビタキは筆者の地元、大田区の馬込八幡神社境内で撮影したものを代用。)



コゲラ (2020.12.27. 大田区南馬込)



ジョウビタキ (2019.12.24. 大田区南馬込)



ツグミ (2020.2.26. イチヨウ並木)

2018年以降に初めて確認した鳥類種

初確認4種のうち2種を写真で紹介する。



20種めのセキセイインコ (2019.4.13. 球場前)



22種めのヤマガラ (2021.3.2. 理科館前)

続・神宮外苑の鳥類相 (p.3 ~ 23) 伊藤 洋文

神宮外苑の鳥類 主要 12 種 (1)



キジバト (2017.6.1. 本校敷地内)



オナガ (2017.5.18. 青高校庭のフェンス)



ハシブトガラス (2017.9.30. 本校敷地内)



シジュウカラ (2018.2.3. 正門近く)



ツバメ (2012.6.27. スタジアム通り)



ヒヨドリ (2017.4.12. 本校敷地内)

続・神宮外苑の鳥類相 (p.3 ~ 23) 伊藤 洋文

神宮外苑の鳥類 主要 12 種 (2)



メジロ (2017.3.4. 理科館前)



ムクドリ (2017.5.27. イチョウ並木)



スズメ (2017.10.26. 本校敷地内)



ハクセキレイ (2018.2.3. 本校校庭)



ドバト (2017.7.31. イチョウ並木)



ワカケホンセイインコ (2017.3.24. 球場前)

続・神宮外苑の鳥類相 (p.3 ~ 23) 伊藤 洋文

新宿御苑の鳥類 (水辺の鳥たち)



カワウ (2019.3.19)



アオサギ (2019.3.19)



ダイサギ (2019.3.19)



カイツブリ (2019.3.19)



マガモ (2019.3.19)



カルガモ (2019.3.19)